

基礎看護技術修得のための自己・相互技術チェックの検討
－VTRチェック活用の試み－

水口 陽子

The Examination of Mutual Technological Checks for Basic Nursing Art Master:
Attempt of VTR Check Use
Yoko Mizuguchi

キーワード：基礎看護技術(basic nursing art), 修得過程(master process),
VTR(video tape record), 自己評価(own evaluation), 他者評価(others evaluation)

要旨

看護技術修得においては、演習時及び自己学習時に繰り返し実施して体に定着させる「身につける段階」の学習が重要であり、本研究は演習「臥床患者のシーツ交換」の自己学習時にVTRチェックを導入し、自己評価及び他者評価（観察者）を実施し、その効果と課題を明らかにすることを目的とする。研究に同意が得られた本学1年生14名を対象に実施し、分析した結果、「しわ・たるみ」「シーツのまとめ・引出し方」「振動への配慮」などの7項目に改善がみられ、これらの項目は教員評価と学生評価の一致率が比較的高かった。「観察・声かけ」「ボディメカニクスの活用」「足元のゆとり」の3項目は改善されないうち変化が少なく、教員評価との一致率が低かった。学生の受けとめ方は、「動作を客観的に見ることができた」等の肯定的な意見が多かった。多くの手技に改善が見られ、特に安楽につながる内容の改善があり、一定の学習効果が得られたと考える。一方で課題も残り、教材等の修正、チェックを効率的に行う方法等の検討が必要であると考えた。

I. 目的

看護技術の修得過程には、知る・身につける・使う段階があり、「知る段階」では、まず演習において正確な技術ポイントと実施の流れを把握できることに重点を置く。次に、練習を繰り返すことでイメージと身体の協応性を高め体に定着させる「身につける段階」がある。演習（知る段階・身につける段階）での修得レベルが、模擬患者及び臨床の患者・看護場面の状況に合わせて実施する「使う段階」の適応力を左右するといわれている。そのため、本学の基礎看護技術演習では、「知る段階」で学習書及びCAI教材の作成を行っている。しかし、演習中に十分に練習を繰り返すには時間的な限界があり、個々の学生の取り組み姿勢には差があること、間違った方法の繰り返しは、かえって技術修得の妨げとなることから、「身につける段階」での学習方法の工夫が必要であると考えた。

研究者は、以前、無菌操作の技術の自己学習時に、実施場面をVTR撮影した後に実施者が視聴し評価する（VTRチェック）研究（小野寺ら、1989）を共同で行い、効果的であり無菌操作以外の技術でも活用できるという示唆を得た。VTRチェックの特徴は「身につける段階」の主體的学習を強化し、自己の技術を客観視しながら修正（フィードバック）することをめざしている。特に、ボディメカニクスや患者への配慮など様々な要素を内包し、定着までに繰り返しを要する基本的な生活援助技術に有用であると考え、今回の研究の技術項目を「臥床患者のシーツ交換」に選定した。また、正確な技術修得のためには、自己の評価に加えて、他の学生の観察者としての評価も役立つ（沖田ら、2004）といわれており、自己評価と他者評価を組み合わせたVTRによる技術学習チェックシステムの構築に取り組みもうと考えた。

本研究の目的は、主体的な技術修得のために、生活援助技術の中からシーツ交換を取り上げ、自己学習時に VTR チェックを導入し、自己評価及び他者評価（観察者）による評価を実施し、その効果と課題を明らかにすることである。

II. 方法

1. 研究期間：平成 19 年 6 月～平成 20 年 3 月
2. 研究対象・方法
 - 1) 本学 1 年生に、研究の趣旨を説明し、同意を得た学生 14 名を対象とする。
 - 2) 臥床患者のシーツ交換に関する自己学習用の CAI 教材を作成する。今回は、自己学習補助教材として、正確な技術ポイントの理解（方法とその根拠）を目標に内容を精選し作成した。
 - 3) 安全・安楽・自立・効率性の視点から 2) で示した技術の技術ポイントを検討し、技術チェックシートを作成した。
 - 4) 研究メンバーで、小グループとなり、患者役にシーツ交換を実施者が行い、撮影者がビデオ撮影し、観察者は場面を観察し、学生同士で役割を交代して実施した。学生に撮影アングル・内容等を示し、2 方向から撮影するように指示しておく。（図 1 に実施と評価の流れを示す）

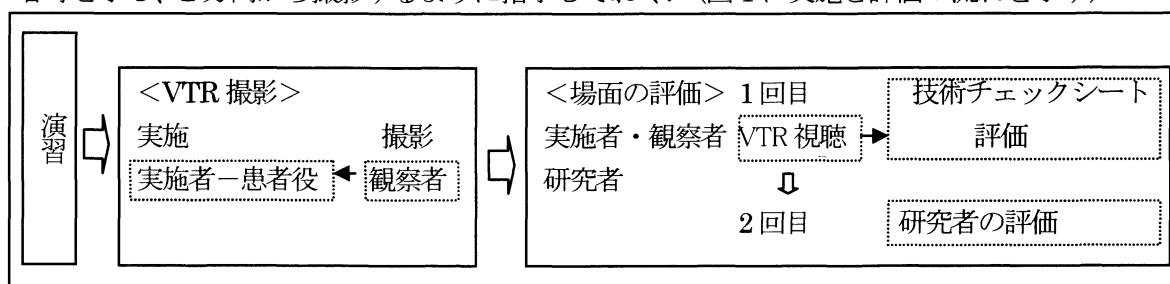


図 1 VTR チェックの流れ

- (1) 実施者は実施直後に場面を想起し気づいたことを記入し評価する。その後、撮影された VTR を視聴し、技術チェックシートにより自己評価を行う。観察者と研究者は同じ場面を技術チェックシートで評価した。実施者は自己評価及び観察者の評価を参考にして改善点を見いだす。
- (2) 学生が練習後に、研究者の前で 2 回目のシーツ交換を行い、研究者は、技術チェックシートを用いて評価した。
- (3) VTR チェックを活用した自己学習に関する学生の受け止め方を半構成質問紙により調査した。
- (4) VTR チェックを活用した学習の成果を、技術チェック結果等について分析し、検討した。
 - ①学生のビデオ撮影場面（1 回目実施）の技術チェックシート記入結果と再度研究者がチェックした場面（2 回目実施）の実施状況から、改善された技術ポイントを抽出した。
 - ②研究者と学生の技術チェック内容を比較し、研究者と差があり、学生の評価が難しい技術ポイントを抽出した。
 - ③VTR チェックを活用した学習に対する学生の受けとめ方に関する記述的データの内容分析を行った。
 これらの検討から学習効果と課題を明らかにし、VTR チェックを導入した基礎看護技術の自己・相互チェックシステムの構築へ向けた基礎資料を得る。

3. 倫理面に関する留意事項

研究を行うにあたり、本学倫理委員会において研究の承認を得た。本学 1 年生には①研究趣旨と内容②研究参加は自由で参加により成績評価を行うものではないこと③研究データは研究目的以外には使用せず研究者が保管すること④研究の公表にあたっては個人が特定できないようにすること等について、文書及び口頭にて説明し、同意書にて研究参加の同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 技術チェック状況

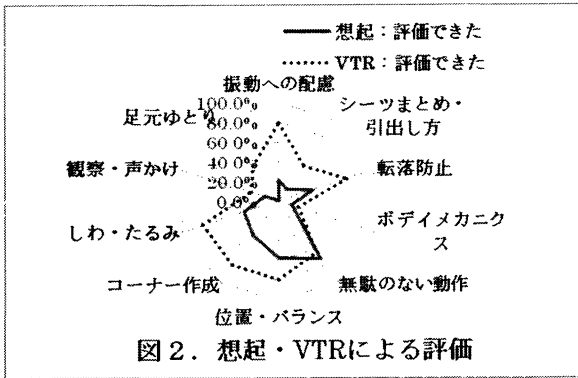


図2. 想起・VTRによる評価

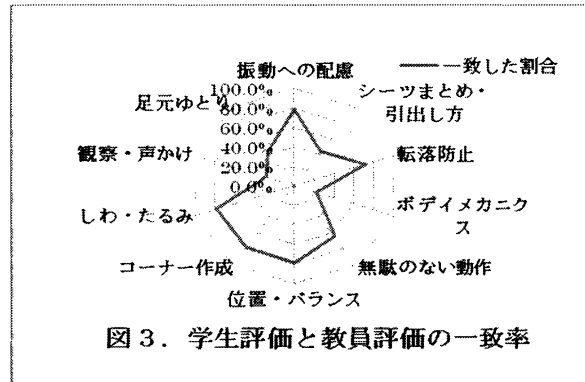


図3. 学生評価と教員評価の一致率

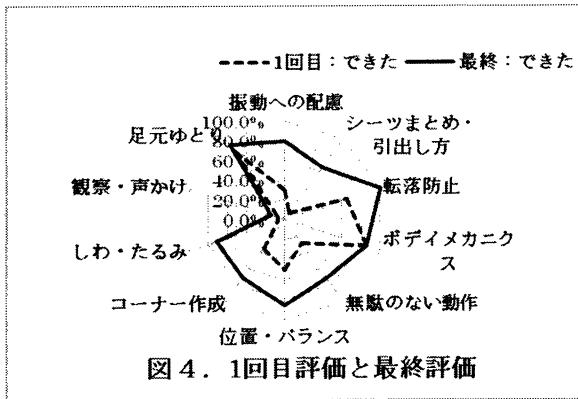


図4. 1回目評価と最終評価

分類(カテゴリー)	記載例
VTRチェックの効果	・実施中は精一杯だったので、チェックで、自分と相手の動作の流れを客観的に見ることができて役立った。 ・練習時はなんとなくここができなかったのかなという感じだが、具体的にできなかったところがわかった
他者チェックの効果	・自分が気づけなかった部分を他の人にチェックしてもらえた
VTRチェックのデメリット	・良い方法と思うが、時間もかかるし1回撮るのに何人も必要なので大変と思った

図5. VTRチェックに対する受けとめ方

1) 学生の評価状況

実施直後に場面を想起し気づいたことを記入した評価とVTRによる学生の評価において、それぞれ正確に評価できた割合(図2)をみると、想起の時は部分的であり、正確に評価できていなかった。学生の技術チェック結果と研究者のチェック結果が一致した程度(図3)は、10の技術ポイントの平均で58.6%であった。一致率が多い順に「振動への配慮」「位置・バランス」「コーナー作成」「しわ・たるみ」「転落防止」「無駄のない動作」「シーツのまとめ・引出し方」「足元のゆとり」「観察・声かけ」「ボディメカニクス」であった。

2) 改善された技術ポイント

学生の撮影場面(1回目実施)の技術チェックシート記入結果と2回目に研究者がチェックした場面(最終実施)の評価状況(図4)から、改善がみられた技術ポイントは、多い順に「しわ・たるみ」「シーツのまとめ・引出し方」「振動への配慮」「無駄のない動作」「転落防止」「位置・バランス」「コーナー作成」であり、先の3項目は半数以上の学生に改善が見られた。改善しなかった、または変化が少なかったポイントは「ボディメカニクス」「観察・声かけ」「足元のゆとり」であった。このうち「ボディメカニクス」は1回目評価でも12人(85.7%)の学生ができていたが最終評価で改善が見られず、「観察・声かけ」は1回目評価、最終評価ともにできている学生が少なかった。

2. VTRチェックを活用した学習に対する学生の受けとめ方

記述内容は、【VTRチェックの効果】【他者チェックの効果】【VTRチェックのデメリット】に分類でき(図5)、効果としては、「実施中は精一杯だったので、チェックをすることで、自分と相手の動作の流れを客観的に見ることができて役立った」「練習時はなんとなくここができなかったのかなという感じだが、チェックで具体的にできなかったところがわかった」「自分が気づけなかった部分を他の人にチェックしてもらえた」等の記述があった。一方「良い方法

と思うが、時間もかかるし1回撮るのに何人も必要なので大変だと思った」の意見があった。

IV. 考察

1. 技術チェック状況

学生の1回目実施と最終チェック時を比較して、改善率が高かった技術ポイントは「しわ・たるみ」「シーツのまとめ・引出し方」「振動への配慮」であった。これらは1回目に課題が残っていた内容である。VTR視聴時に自己の手技が患者の不快感等の安楽のあり方に直接影響することが見えてきて、気づくことできたと考えられる。また、これらは学生評価と教員評価と一致率が高く、学生が自分の手の使い方、シーツの扱い方等の動作を全体的に見直すことができ改善につながったと考えられる。「無駄のない動作」「転落防止」「位置・バランス」「コーナー作成」等は、1回目ではできている学生とできていない学生がいた。実施中は万遍なく技術ポイントを考えて全てうまくできることは難しいが、VTR視聴により実施手順の各段階における技術ポイントを見直すことで改善につながったと考えられる。

改善があまり見られなかったポイントは「ボデイレカメカニクス」「観察・声かけ」「足元のゆとり」であった。このうち「ボデイレカメカニクス」は1回目には12人(85.7%)の学生ができていたが、最終の改善がみられなかった。教員評価との一致率が低く、この技術の手順というよりも体全体の使い方等の基本から見直さなければならない内容であるため注目しにくい学生もいたと考えられる。一方「観察・声かけ」は学生の意識が低く、多くの学生が最終段階でも課題を残している。チェックという意識が強く、看護場面として捉えることができなかつたためと考えられる。関わりを含めて相手にとって適切な「看護技術とは」を常に意識していく必要がある。

2. VTRチェックを活用した学習に対する学生の受けとめ方

実施した学生は、具体的に良くないところに気づくことができた等の肯定的な受けとめ方が多かった。また、自己評価と他者評価を組み合わせたことも、自分でわからないところに気づくことができた等の意見があり有用であると考えられる。一方、少数意見ではあるが、時間がかかって大変という意見もあり、効率的なチェックの実施へ向けた改善の検討が必要と考える。

V. 結論

1. 改善者が多かった技術ポイントは「しわ・たるみ」「シーツのまとめ・引出し方」「振動への配慮」等の患者の安楽につながる内容であった。改善がみられなかったり、変化が少なかったのは「ボデイレカメカニクスの活用」「観察・声かけ」「足元のゆとり」であった。
2. 改善者が多かったポイントは、学生評価と教員評価の一致率が比較的高く、学生が正確に評価できることが技術を主体的に修正していくことにつながると考える。
3. 学生の受けとめ方は、動作を客観的に見ることができ、具体的にできていないところがわかった等の肯定的な意見が多かった。

一方で課題も残り、今後も教材等の修正及び「看護技術とは」の概念を定着させる方法を含めた検討が必要である。また、今回は協力者の範囲内での傾向の分析にとどまった。研究参加が容易でなかった背景には、「時間がかかる」等の意見があったため、今後は機器を整備して効率化を図ることでデータ数を増やし、演習を行った学生全体の傾向を検討していくことが課題である。

文献

- ・沖田聖枝, 岡田淳子, 坂本みどり, 他 (2004) : 自己評価および他者評価を取り入れた看護技術教育の検討, 日本看護研究学会雑誌, 27(3), 100.
- ・小野寺利江, 嘉手苺栄子, 水口陽子, 他 (1989) : 看護技術の<自己学習チェックシステム>にビデオチェック導入の試み, 日本看護科学会誌 9(3), 142-143.